

KODAK Gray Scale

M

Y

C

KODAK
LICENSED PRODUCT

丘の外郊

舟孤島田小

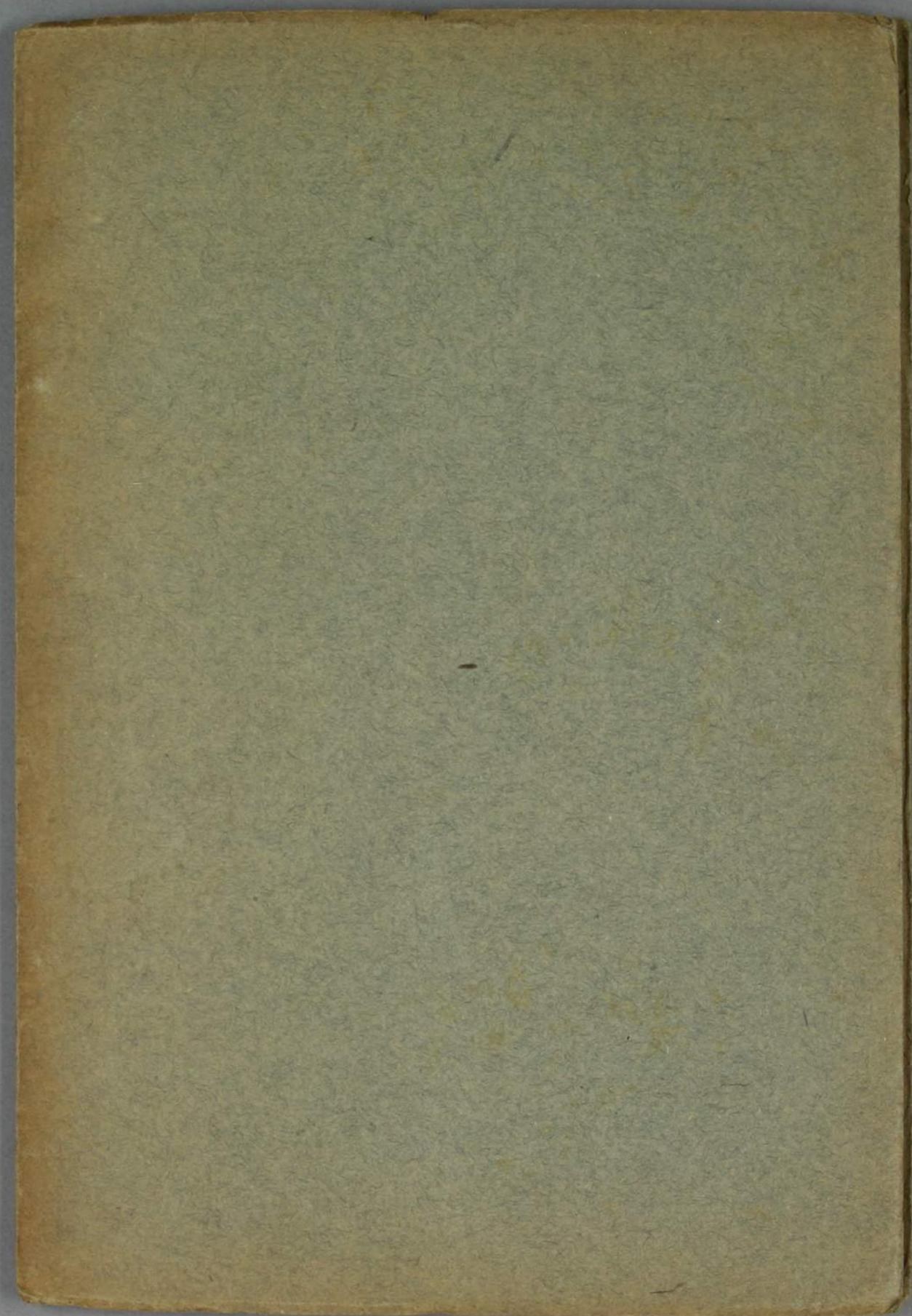
5

10

15

20

25



郊外の丘

小田島孤舟作

この小著を故郷の
山河に献ず

故郷の五

小田島通子

吾がために光もて來るものとのみ來ん日を待
ちき幼心おこなこころに

われはしも大野おほのの草を食む牛うしののろのろごこ
ろうけて生いくらし

ふるさとの草の家見ゆる丘かみの上の木蔭かげこひし
み君といこひさ

夜も晝も白檀かをり人を待つ香爐のごとき少
女ごころよ

みちのくの片山里に住むとのみわれはおもひ
き大空のもと

忽然と瞳の中にうつくしき少女うまれてはれ
やかに笑む

ゆゑしらずおほわたつみにむかふ時霰のごと
く涙しおちぬ

まことげにかごとをいひて家を出ぬ後のここ
ろを泣かぬならねど

けふもまたはた行末も君をのみ見て果てなん
ず大空にむく

何となく心をのきたえがたしかゝる日つづ
きわれ死なむかも

夏の日のみどりかなしき故郷の木立おもへば
君ししのばゆ

いまもなほ岬に立ちてうたひける少女の眉の
ほのに匂へる

われをして心ゆくまで泣かしめよ泣きつくし
たる後は死になむ

人妻にこころをよせてありしことかなしきこ
とをねもひいでつもの

すくすくと向日葵草の延びゆくを見るだにか
なしやくざ男は

クリストの前にピアノの鍵をうつ清し女みんと教會に行く

冬の朝時雨のごとく一しさり木立をわたる山雀の群

うすいろの黄に濁りたる水薬の罫にうつりぬ赤きネクタイ

何となくうれしき思ひに耽りつつコンクリートに靴ぬぐひぬ

しなやかに上靴ならし君は來ぬわが手なれざるキオロンの音に

いとつよされしろいの香のただよへる明るき部屋のあはき悲しみ

呑みさしの葉巻の灰をかなしげに見つめてあ
りし友禪の子よ

山の手の肺病院に青白き瓦斯の火ともる春の
いたまし

草色のティブルかけに午後の陽の光は匂へり
鶯のなく

つつみえぬわが喜びは電燈の明るき部屋にこ
ぼるるをみる

歸り来てホワイトシャツを脱ぐときに悲しき
ことをねもひいでつる

夕暮のメトロポールに灯のともる頃としなれ
ば心あかるし

何げなく笑ひてあれど君去ればわが事務室は
さびしかりけり

別るる日いとかなしげに事務室のガラス戸な
がめ君はありけり

どことなく汽笛の音のすみわたる夕べとなれ
ば君の戀しき

夕さればこゝろ明るくときめきてまたあたら
しきもの思ひする

何となく心ひがみてなぐさまずひとりあるべ
くわれ生れけむ

かはたれの薄き光に白き花さゆらぎてあり歸
り來れば

路みちばたのかほそき草もなつかしき心となりて
かへり來れる

河岸にただ茫然ぼうぜんと立ちつくし悲しくなりて家
にかへりぬ

君去れば巢すだちしあとの巢のごとくこころさ
びしくなりまさるかな

さかづきのわが唇くちびるに觸ふるととき破れしごとく
戀は終りぬ

わがおもふ君のかへれる故郷ふるさとの若草わかしら山やまは遠く
明あるし

強きとかたみにいひて笑ひぬしわれらはやや
に涙ぐみぬる

まるめろのうすら匂ひてくれなやむ垣根づた
ひにものおもひする

何となくそはそはしくも退けて行く吾れにす
げなくなりし君かも

ものいひのいともやさしくありしかな琴ひく
ふりも眼にうがび來ぬ

すげなくも女は去りぬややにしていらだつ胸
にさびしみのわく

ふとさめて枕ひきよせ寝かへればこぼろぎの
音のかなしかりけり

暮れなやむかの停車場のガラス戸は雨に咽び
てかなしかりける

誘はるるままに出づれば郊外はゆめのごとくに夜の更けてあり

こころよく卓を圍みてペンをとる郊野をわたる風明き朝

郊外の風明き野に野葡萄の實などを吸ひて別れけるかな

風わたる郊野の草の赤き實に小鳥きたりてチとなきをる

高原をひとり歩めばやや倦みしところをそそる草の香のあり

こころよく君を迎へて卓につくカンナの花の咲きそめし朝

白樺は風に光れりあかるかにわれに迫りし秋
の山かな

同僚は卓をかこみてペンとれりひとりものう
く郊外をみる

幾群の木立を過ぎて來りけむ裾野をわたる風
さむきかな

わが前に郊野はひらけ風光るやや汗ばみし肌
のつめたさ

しづやかに裾野は晴れてたち枯れのかほそき
樹々に日光のちる

郊外にとんぼがへりを見てありぬうつらがな
しき思出のあり

夜のふけし野の停車場のうす明りうらがなし
くも避けて歩めり

幾山河いとあかるに見ゆるかな葉巻の烟紫に
たつ

群立てるをちの山脈ほの白く明け行く見えて
寒き朝かな

ややすこし飢と勞れをねぼえけり野の停車場
の見えそめし頃

この日頃わが事務室に紅き帯ひとつまじるが
哀しかりけり

いつの間に男なれをばしにけむとおもへばに
くき女なるかな

この日頃椅子にシヨールをかけながしけだる
ささまに卓につくひと

手ざはりのところをそそる皮椅子のひとつま
じりし室の夕暮

手套を脱げはすこしく汗ばめる指のさきより
冬の風泌む

いとかるき怒をみせしあてやかさもひつづ
けて金ペンをとる

籐椅子に掛けながしたる桃色の君がシヨール
の手ざはりのよき

君去りてさびしくなれる事務室にひとりのこ
りて日誌書くかな

亡き友のうるはしかりしあはれさにかの看護
婦を泣かせけるかな

しみじみとももの哀れをかたりけり盛岡病院
の若き看護婦

いとつよき嫉みに泣きてものはぬ十日ばかり
はさびしかりけり

うちまじり笑ひてあれど消しがたきかなしさ
まじる晝のチャブ臺

いさかひの後のころのさびしさにうらがな
しくも卓をはなるる

何げなく語りしかどもかほいろを少しかへし
がかなしかりけり

あちついで少しも色にみせぬほどをとこなれ
をばしてありしかな

うちあけてかたる折などおもひぬ吾が事務
室の朝のしづけさ

草青む郊野に立ちて遠空をみつめてあればほ
ろろ鳥なく

郊外にたち枯れし樹も芽をふきてうすら匂へ
る春の午後かな

やはらかに心をいだく思出になぐさめられて
郊外に行く

青ずみし南の空をながめいりうらがなしくも
なりにけるかな

夜となればただわけもなう眠くなるこゝろ安
さのうれしかりけれ

灯のともるかはたれ時をなつかしくピアノ時
計のなりいでしかな

汽笛などかすかに聞ゆる効外の春の樹により
目を閉ぢてゐぬ

曇れる夜うしろの丘に遠山の焼くるを見つ
君待ちしかな

木のまよりみゆる燈をなつかしみ後の丘に登
りゆくかな

木の間よりあはく射し来る燈火をみつめてあ
りし丘の夕暮

まだ淺き春の郊野にほろろなく小鳥の聲のな
つかしきかな

疎らなる林をすかし遠山をみつめてあれば風
光る午後

ちらちらと街にともひのともる頃ほろろ雉子
なき山櫻ちる

圓らかに遠の山々みゆるかな風あたたかに山
櫻散る

はらかならのごとくしたしみ馴れたれどはかな
き愛と泣かれぬるかな

彼のひとのことをおもひてありにけり町に灯
ともり夜となれるかな

昨夜もまた街であひしがこころよくことばを
かけきなつかしきかな

なつかしといふまでのことそれさへもいひが
てにして別れけるかな

うちあけて語る折なきかなしさにはかなき愛
の身にさびしけれ

この心放り出して語りなば何といふらむなつ
かしきかな

今ごろは何とおもひて居るならむこころ可愛
くなりまさるかな

別れなばまたあふこともかたからむうるはし
かりし愛のはかなさ

日に疎とろくなりゆくとの悲しけれいかにおもひ
いまはあるらむ

誰たがために赤きひなげし咲きにけむうらさび
しくもなれる吾が庭

夕されどいつもの窓に灯あかりのつかずさびれし街
をひとりさまよふ

うつくしと思ひしことはかなかりはやもひな
げし散りにけるかな

君をしも忘れぬころかなしけれ汽笛かすか
にけふも暮れ行く

いくたびかやるせなさなどうたひてはころ
そそりきひなげしの散る

いたはられいたはることもなくなりしはなればなれのころかなしや

たやすくも彼の女より放たれし吾がたましひのいかになるらむ

新緑の光のなかに浸れどもころは暗く吾れをみつむる

いくたびか乳房さぐられうち泣かれやるせなき身に空白むかな

抱いて寝し稚兒をおもひて逃亡の悲しさに泣く初夏の朝

吾れをみてころ可愛く近よりし少女の眼もと燃えてあるかな

少女等のつぶらなる頬をめぐる血のいと鮮かに六月は來ぬ

愛らしき女の子等にとりまかれこころ明るくなりし教卓

うら若き君が瞳を盗み見る人のなべてを嫉みけるかな

産褥の妻は眠れりみどり兒は腫あかるく吾れをみつむる

何物かみつむるごとく眼をはりし稚兒の腫にうつる吾が顔

うら若さいのち盛られし吾が稚兒の腫あかりし六月の晝

七月しつぐわつの空を眺めてこの頃のわが健康をよろこ
べるかな

桐の葉の青き光と三味線のひびきまつはる八
月の晝

三味線の響かよひて桐の葉の青き反射はんしのうご
くさかづき盃

つぐままにつがせておきし盃さかづきに雛妓ひなぎの帯の紅
き八月

あきらめのかなしかりにし別れかな街まちの灯ひ明あか
り吾れを照しき

やるせなきころひとつをかきみだしひとり
悲しく病めるわれかな

いま頃は子等は騒ぎをるならむか弱き妻は泣いてをるらむ

吾が子等は父の病も知らざらむ獨りさびしく寝ざめぬるかな

つれづれをなぐさめくるる看護婦の眼もと可愛く燃ゆる日のあり

驗温器かろく振りては陽にかざす若き腫のゆへくやなしや

とるままに吾が手とらせて眼をつぶり胸の鼓動をかぞふ初秋

吾が病訪ふひともなくすてられしむくろに動く暮れの灯

やうやくに病の軽くなりし身を樹の間にはこ
ぶ晴れし朝かな

ただひとり樹の間に入りて陽のかげを歩みて
をればこほろぎの啼く

日没ひるもとの前の小草こくさに青き羽根はねうちふるはして鳴
く蟲むしのあり

ひ弱なる妻をもてるが哀あはしみのひとつとなり
て夏も暮れしかな

草の穂ほの黄ばめる門かどに別れたる若き少女の腫
かなしや

みどり兒の細くか弱き寢息ねいきにも心おびえて眠
られぬかな

草の實の熟れてこぼるる田圃路わかれて來ればなけるこぼろぎ

みはらしのよき窓近くはこばれぬ黄なる陽の色部屋に明るし

病弱の身を教卓にはこびゆき兒等にむかへるかなしき心

妻や子とはなればなれに別れをり吾が行く道に獨歩まむ

普天のもと吾が行くみちはあらざるかすて身になりし秋の悲しさ

何か知らず不満のこころの動く秋暗き灯にうで組みてるぬ

心弱く郷の山河にうづもれてあきたらぬ日の
つづく秋かな

あきたらぬ幾年月をうづもれし郷の山河に雪
ふりいでぬ

やるせなく別れし夜などをねもひつつ灯影に
ひとり泣いてをるらむ

抱いて寝し稚兒の肩さき冷えてあり吹雪に窓
の白むあかつき

銀色の郊野ひかりて眼はいたし木立に入れば
肌寒きかな

いひがたき不満のこころを抱きつつ別れしひ
とをなつかしむかな

いのちさへ棒^{ぼう}げてありし來^こし方^{かた}の吾^{われ}れをかな
しむ別^{わか}れなるかな

うち曇^{くも}り憂^{うれ}ひを帯^おびし妻^{つま}の眼^めをのがれきたり
て街^{まち}の灯^ひをみる

病^{びやう}弱^{じやく}の眼^めにいたいたし麗^{うる}けき郷^{きやう}の山^{さん}河^がの春^{はる}の
外^{ぐわい}光^{くわう}

幾^{いく}山^{さん}河^がへだてしままに杳^{きやう}としてむなしく暮^{くれ}れ
し二^に月^{げつ}の春^{はる}

いつまでかはかなき愛^{あい}に泣^なくならむ別^{わか}れまま
に春^{はる}の雪^{ゆき}ふる

逢^あふともうちあけてなどいはざらむあはて
死^しぬるもかなしや吾^{われ}れは

妻と子のなかに老いゆく吾が影のさびしいか
なやたんぼぼの咲く

楓かえでの芽赤くひかれる岡にたち遠く山みて君な
つかしむ

柔くのびし楓の芽はほぐれ赤く光りて鶯のな
く

やはらかく光を吸ひし土踏めばこころ明るく
咽ぶむせ二月にふが

柔くのびし梢こぎすのさみどりに春の陽明ひるみし河ぞひ
の樹々

あはあはと萌えし小草をみつめても涙わさく
る春の山かな

いひもえぬ悲しきこころ誘ひつつ喚きし初め
たる山櫻かな

ばつちりとはれてすこしくうるむ腫にちらち
らとちる山櫻かな

よく俺もつとめけるかな教壇をいくたび上り
いくたび下りけむ

つとめよりかへる街々灯はつきぬ吾が一日の
ものはかなさよ

一日の仕事につかれうつとりと寝てしまふよ
りかなしきはなし

あかあかとひなげし咲きぬみつむればめまぐ
るしくも光るひとひら

けしの花赤々と空に咲き出てぬかなしきおも
ひ出そそるひとひら

八月はわが育ちたる家に行き手足のばしてゆ
つくりと寝む

——郊外の丘——
(完)

山吹草花見せり
平野に人見せり
~~~~~  
水田島遊歩  
~~~~~  
甲斐の人
王権堂吉
~~~~~  
甲斐の青  
富士山頂見渡  
~~~~~  
鎌倉の海
~~~~~  
宝鏡金世王殿

12710

刷印日十月九年元正大  
行發日五十月九年元正大

者行發兼作著

舟孤島田小

村寺法淨郡戶二縣手岩

人刷印

吉倉藤工

四三町服吳市岡盛縣手岩

所刷印

所刷印屋士富

四三町服吳市岡盛縣手岩

所行發

社野曠

村寺法淨郡戶二縣手岩

錢五廿金價定